



21世紀の 心の作法

京都からの緊急提言

もくじ

◆総論	2
「心の作法」の開発が求められる現代と京都 山折 哲雄	
◆提言Ⅰ 家庭と暮らしの場で……	4
もののまこと 暮らしのゆるリズムを追求する	
提言Ⅰ-1 「もったいない」と「ありがたい」	
提言Ⅰ-2 坪庭の思想を生かす	
提言Ⅰ-3 伝統文化を再発見する	
◆提言Ⅱ 地域コミュニティの場で……	8
いとどかし 心の遊山を楽しむ教育としつけを	
提言Ⅱ-1 祭りや地蔵盆が伝承する価値を再発見する	
提言Ⅱ-2 先人の智恵と暮らしの心を受け継ぐ	
提言Ⅱ-3 一見さんお断りの合理性に学ぶ	
提言Ⅱ-4 小学校教育に茶道、華道を導入する	
◆提言Ⅲ 自然・環境と向き合う場で……	11
もののあはれ 心の花野を育み愛しもう	
提言Ⅲ-1 山川草木に親しむ	
提言Ⅲ-2 一家団欒の食卓を通じて自然の恵みを実感する	
提言Ⅲ-3 ハレの行事を通じて季節感を磨く	
提言Ⅲ-4 新たな環境教育として取り組む	
◆提言Ⅳ 京都企業の経営の心を……	14
もののあはれ 「信用」を重んじ「己」を律する心を育む	
提言Ⅳ-1 信用を築く三つの要件	
提言Ⅳ-2 「見てござる」という自戒	
提言Ⅳ-3 「吾唯足知」の自律	
提言Ⅳ-4 「五常の徳」の実行	
提言Ⅳ-5 「三方良し」と「先義後利」がもたらす繁栄	

2005年9月

社団法人 京都経済同友会 21世紀委員会

はじめに

本委員会は、「宗教都市・京都」、「文化芸術都市・京都」、「大学都市・京都」という三つの視点から、京都が有する“歴史都市”としての深みや凄みを原点から洗い直し、追究してみようと、平成14年度にスタートさせたものであります。

平成15年度においては、その委員会活動の一環として『京都百年考——文化芸術都市の創造に向けて』と題する提言報告書を取り纏め、榊本頼兼京都市長宛てに緊急提言。その後も「崩れゆく日本人の心の作法と精神性」をテーマに、種々論議を深めてまいったところであります。

昨今の日本人の“ものの考え方”、“心のありよう”は、大人から子どもまで、乱れに乱れてきているように思えてなりません。政界から官界、経済界のみならず、一般国民社会においても、このところ道理や倫理を踏み外した不祥事や事件が相次ぎ、これまでの日本人の感覚では考えられないような凄惨な犯罪が多発しております。

我が国の国家と国民の心のありようは、はたしてこれで良いのでしょうか。元来、日本人が日本人として大切にしてきた“心の作法”や“恥の文化”、“恥を知る社会”はどこに行ってしまったのでしょうか。

本委員会では、以上の視点をもとに、「精神文化の地・京都」、「日本人の心のふるさと・京都」から、これからの子どもたちへの人間教育のあり方、家庭及び地域での子どもへのしつけのあり方——について一石を投じるべく、『21世紀の心の作法——京都からの緊急提言』と題して本提言報告書を取り纏めるに至った次第です。

ご一読いただいたうえで皆様方のご理解とご協力方を、そしてご批判を心からお願い申し上げます。

平成17年 9 月

社団法人 京都経済同友会

21世紀委員会

平成15～16年度委員長 内田昌一

「心の作法」の開發 が求められる現代と京都

山折 哲雄



総論

2

近年、駅前の京都タワーが古都の街並みになじむようになってきた。それが建設された当初はとかくの風評が立たないではなかったが、しかしいつのまにか雅な趣を残す京都の文化的な雰囲気にとけこむようになった。とりわけ平安時代の面影をしのばせる東寺の五重塔と形影寄りするような恰好で、朝に夕に、それを見上げるものの心を和ませるようになった。塔という伝統ある品位と、タワーと称するモダンな味わいが、手に手を取り合って街の活気を取り戻し、人びとの心の静けさを映し出している。

その伝統と革新の取り合わせの妙。品位と手触り感覚のバランスはもともと、このわれわれの日本列島が長い時間をかけて営々と育んできたものだった。それが今日、京都にはいまだに濃厚に保存され、絶えることなく息づいている。

衰退する日本人の精神と、 進行する心の世界の空洞化

その京都タワーにのぼって四方を見渡してみよう。すると何が見えてくるだろうか。この1,200年の伝統をもつ都が山懐に抱かれ、御所を中心に発展してきた都市であることがよくわかる。森のかなたや山麓にはホトケの堂やカミの社が建てられている。そして中心を占める御所には、国の宗教シンボルとして文化天皇がお住まいになっていた。神仏共存の環境と象徴天皇の居場所が絶妙のバランスをとって配置されている。都市形成の京都パターンと言っていだろう。いわばそれが日本文明の核をつくってきたといえないこともない。

だがひるがえって、わが国の現状をみる

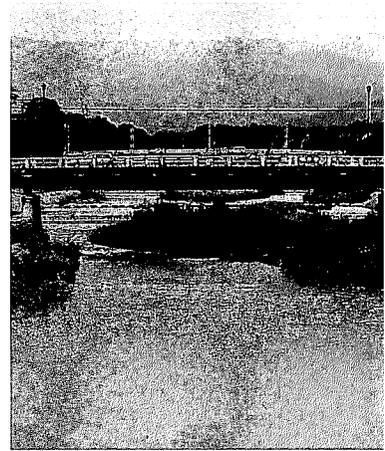
とどうだろうか。家庭や教育現場における人間関係の乱れ、公的機関や企業における不祥事、そして心の凍りつくような残虐な事件の発生など、いずれも日本人の精神の衰退、かつての日本人がもっていたはずの倫理性の喪失を示す兆候ではないだろうか。物質的な豊かさにとまなう心の世界の空洞化が危機的な様相を呈し、人びとの心に言い知れぬ不安感を生じさせているのである。

なぜそのようなことになったのか。むろん原因はいろいろ考えられるであろう。だが第一に見過ごすことのできないのが、やはり教育の問題だったのではないだろうか。戦後の教育制度を振り返ればわかるが、そこでは常に科学技術と社会科学を重視する政策がとられてきた。むろんそのこと自体は至極当然の選択であったが、しかしそのため文化、芸術、宗教などの問題が周縁的な扱いしか受けてこなかったことも否定することができない。その結果、人間の精神性と倫理観を育む「心の作法」がおろそかにされてきたのだと思う。

「心の作法」を喚起する 環境づくりに結集すべき時

このような反省に立つとき、われわれはいまや、科学技術と社会科学の重視という旗を掲げるとともに、第三の教育軸としてこのような「心の作法」を喚起する環境づくりのため、われわれの智慧と努力を結集すべき段階にきているのである。

ところで、その「心の作法」を育むとはいったいどういうことか。そのためには、何よりも長期の将来展望に立って、千年の歴史の風雪に耐えて形成された日本人の



「心」の伝統に深く学ぶところから始めなければならないであろう。たとえば『万葉集』、『源氏物語』から浄瑠璃まで、空海、最澄から親鸞、道元、日蓮、そして世阿弥まで、「心」の探求に費やされた巨大なエネルギーの鼓動にまず心の耳を傾けるということではないだろうか。知育に対する徳育や宗教的情操の涵養といった問題もある。いずれにしても、長期的な展望に立った人間教育をめざして、心を育むためのグローバル・スタンダードを確立することこそ今日の急務であると、われわれは考えている。

「心の作法」を発掘する装置・遺産を備えている京都

このようにみてくるとき、京都にはそのような「心の作法」を発掘し再評価していくための遺産や装置が少なからず残されていることに気づく。季節の巡りとともに絶えることなく続けられてきた数多くの年中行事、茶道のたしなみや生け花の華やぎを通して育てられてきたもてなしや礼節の心などがそれであり、その蓄積が陰に陽に衣食住の生活に精気あるリズムを維持させてきた。そしてもちろん、これらのことは日本列島に住むわれわれのすべてが共有してきた生活感覚だったのである。

いうまでもないが、今日、上にみてきたような生活感覚とそれを支えている価値観を再確認し、それぞれに自己のものとしていくのは容易な仕事ではない。人知れぬ工夫を要し、また時間もかかることだからである。

第一に心しなければならぬのが、時代の疲弊が告げる、不安と危機感を人びとと共有することから始めることである。そのことによって、もともと共同体がもっていた強靱な復元力を手にすることができるかもしれない。第二に、われわれ自身の足元にじっくり思いを至すことではないだろうか。自己の振る舞いを総点検することを、かつてわれわれは「脚下照顧」といった。そして第三は、隣人をはじめとする人間関係を忍耐強く取り戻していくことであ

る。そのことを通して暮らしの基本をなす他者との共生という行き方を確かなものに行うことができるのだと思う。

いずれにしろ「心の作法」ということを考える場合、われわれの側に長期の将来展望に立つ覚悟がなければならない。それが、単なる短期的な時代の要求に応ずる教育、対症療法的な実用教育によって可能になるとは到底思われないからである。30年、50年先を見通した人間教育、再び今日流行の言葉をかりて言えば、精神のグローバル・スタンダードを構想する生涯教育が、その「心の作法」の真の開発のためには欠かすことができない。

「心の作法」を開発する三つの位相

今日、この「心の作法」を開発するうえで三つの位相を考えることができるのではないだろうか。

第一は心理学的な「心」の領域にかかわる位相である。基本的には社会科学的手法に基づくものであるが、その大半は現実の困難に対して対症療法的な処方箋を書こうとする傾向があると言っていいだろう。短期的な実用教育の最たるものと言っていいかもしれない。

第二に、いわゆる「道徳教育」論に象徴される伝統的な精神論である。時代が危機的様相を深めるとき、決まって登場してくる硬直した議論であるが、しかしその古色蒼然とした旧時代の旋律が人びとの心に届くことはあまりない。

そして第三が、冒頭にもふれたように、千年の歴史の風雪に育まれてきた日本の「心」の伝統に深く学ぼうとする態度である。すぐれた先人たちがその全精力を傾けてきた「心」の探求、そしてそのことを通して蓄積されてきた智恵の結晶に学ぶ生き方である。21世紀という新しい時代の幕開けが、とりわけそのことをわれわれに強く要請していると言わなければならないのである。

ものまこと

暮らしのゆるりズム を追求する

ことわざに「三つ子の魂百まで」という。「子は親の後ろ姿を見て育つ」ともいう。幼少期の家庭環境やしつけの影響力は決定的である。ところが近年の日本では、こうした家庭の力が急速に弱まってしまっている。マスコミが騒ぐような凶悪な犯罪が頻発しているが、そうした場合、たいてい家庭の問題が指摘される。幼少期に親子のしっかりした信頼関係が築けておらず、適切なしつけもなおざりにされている。その挙句、人間を健全に育てる場所であった家庭が、いつしか社会の病巣になってしまったのである。

高度成長時代に流行した「家つき・カーつき・婆あ抜き」という言葉に象徴されるように、マイホーム主義の跋扈、さらに個人主義が蔓延するに及んで、父母世代のみならず祖父母まで排除してしまった戦後世代は、日本の伝統的な生活や人生の智慧を忘れてしまった。これには、先の敗戦で自信を喪失した戦中派の親たちが、戦後、日本的なものを否定する時代の風潮のなかで日本の伝統や「心の作法」を子どもたちに伝えられなかったこともあずかっただろう。これについては、戦後世代の先頭を切った団塊世代の少年時代にテレビが急速に普及し、家庭の教育力を奪った影響も無視できない。

事態は切迫している。このまま推移すれば、日本は内部から溶解してしまうだろう。社会の基本である家庭の教育力を取り戻さなければならない。三つ子の魂を健やかにしつけることのできる家庭を再構築しなければならない。それには、戦災を受けることなく、千年余にわたって日本の伝統を育

んできた京都の智慧が役に立つのではあるまいか。

家庭の教育力を取り戻すといっても、すでに親の世代は日本の素晴らしい伝統や精神を忘れつつある。京都において実施されている「きょうの寺子屋・親子塾」のように、親と子がともに学び互いに啓発し合うシステムの構築も急がれる。その後ろ姿だけでなく、正面から子どもと向き合える親世代が必要とされているのである。



提言Ⅰ-1……………

「もったいない」と 「ありがたい」

「消費は美德」というテレビコマーシャルが流れ、大量生産・大量消費を謳歌した高度成長時代、年配の人たちがよく口にしたのは「もったいない」であった。それも今日では死語となりかかっている。ところが、その「もったいない」という言葉が、緑化運動を展開してノーベル平和賞を受賞したケニアのワンガリ・マータイ女史によって広く世界に認知されようとしている。「もったいない」は単なる節約の精神ではない。そのもの持っている価値を生かしきれないことを惜しんで言う言葉である。一方、「ありがたい」は神に感謝し、他者に感謝し、それによって生かされることに感謝する言葉である。京都ではこの「もったいない」、「ありがたい」の意識を美意識と表裏一体にして高度に洗練してきた。そして、地球環境問題が切迫している今日、この二

つの言葉は新しい輝きを放って、京都から発信できる生活作法のキーワードになろうとしている。

きものが滲える智恵と心

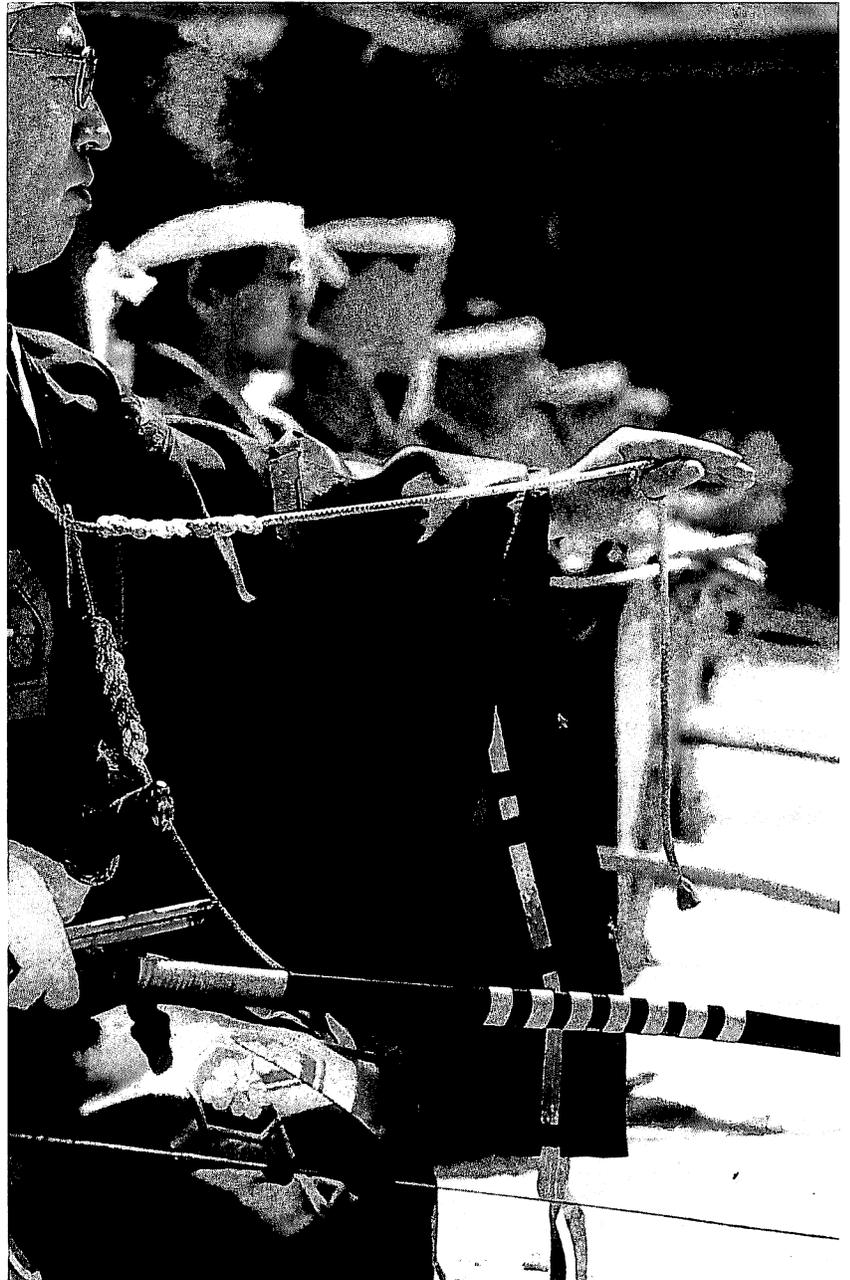
戦前の日本人の85パーセントは和装で暮らしていた。和装にはさまざまな智恵が滲えられている。なかでも雛型によって1枚ずつつくりだされる本来の正絹きもの詠えには不良在庫や返品などあり得るはずもなく、なによりも愛着の準備が整えられる。幾工程を経てできあがるのを待ち、これを丸巻（1枚の布）として保管し、身につける機会を待ち、機が訪れば仕立てに出し、仕上がりを待つというように「待つ楽しみ」をきものは与える。袖を通した後は、洗い張りに出し、また仕舞う。虫干しをし、適宜染め直し、親から娘へ、そして孫へと、形見として受け継ぎ、実用する。

このこと的前提には、本物の素材や技術が要る。それは旧家で出されたお碗の軽さや馴染みの良さにそれが漆と気づき、汁を飲み干せば漆の剥落に職人の確かな下塗りの技が見える、あるいは無垢の木材の床や手摺りが黒光り、無数の疵を味わいにするのと通底している。可能な限り手を入れ尽くして朽ちるまで使い込み、同時に天然素材の移ろいを玩味する。さらに、成長の早い麻に準えて「麻の葉文様」を子どものきものに施し、長寿を願って「菊の文様」をあしらうなど、伝統文様には悉く由来があり、人は喜んでその縁起の担ぎ屋となり、衣装に想いを宿らせる。このような嗜みには、物をぞんざいに扱う気配は微塵もなく、ゆかりの古布の小物やお守り袋が、今日の高級指向やブランド指向と本物指向の違いを、そして「もったいない」と「ありがたい」を美しさのなかに寡黙に語る。

京の食卓に込められた四季と始末

わが国の食卓は折々の自然の恵みに彩られてきた。ことさら京都では、ものの盛りを「旬」として味わう前に、季節の先駆け「走り」を楽しみ、盛りの後に行く季節を

惜しんで「名残」を珍重する。落ち鱧と松茸の早物を土瓶蒸しにして馳走にするなどは、季節の間に楽しむ「名残」と「走り」の好個の一例である。盛りに至らぬ、また盛りを過ぎた味わいを珍重することは、暮らしに季節の移ろいを映し出すと同時に、食材の命の居場所をより長らく確保することでもある。こうした贅は、日々の始末があるからこそ、より「ありがたい」ものとなる。たとえば残り物でおばんざいを拵え、折々の安価で良質な食材を調達し、日々の食事をやりくりする。ここにもまた、そこにあるものを生かし切るという資源からの



歩射神事（下鴨神社）



発想がある。これを調理法や保存法などの技術が支える。決して、腕を見せたい、これこれの献立を作りたいから材料を取り揃えるという技術からの発想ではない。さまざまな手立てを尽くして、恵みに感謝し、その価値を生かし切ることで人と自然が和し、季節との対話を美意識にまで高める。その嗜みを和風（京風）と呼んで久しい。

提言 1-2.....
坪庭の思想を生かす

京都の町家には坪庭と呼ばれる小さな中庭がある。その周囲には座敷や居間が配置

されていて、「^{うなぎ}鰻の寝床」と称される奥行き深い町家に外光を採り入れ、暑い夏には風を通し、ほっとくつろげる憩いの空間になっている。なによりも、坪庭は家が建ち並んだ街中にありながら、人間の生活と自然が感応し合い、一つに解け合う聖なる空間なのである。近ごろ、町家を再利用した喫茶店やレストランでも坪庭が活用されているが、これなども京都の坪庭の思想が再発見されつつある一例であるだろう。

坪庭には雨も雪も降ってくる。晴れた日には日も射し込んでくる。わずかながら植栽もあり、花が咲き、新緑が萌え、晩秋には紅葉し、落葉する。家屋の一部として取り込まれた小さな空間を通して、季節の変化を感得することができる。

狩猟採取を主にした縄文時代、さらには夏のモンスーン気候を効率的に利用して稲作に勤しんだ弥生時代から、日本人は自然のリズムに自らを合わせることによって、暮らしの充足と安堵を得てきた。自然は移ろいゆくものであり、その絶えざる変化を逸早く感得して、そこに自らの暮らしや行動を一致させることが、豊かな自然の恵みをもたらしてくれたのである。自然と一つに解け合うことが日本人の至福であり、やすらぎであった。だからこそ、夏になれば屋内の装いを替え、すだれを吊るし、掛軸を替えた。衣も季節に相応しいものに替えなければならないのである。

四季とともにあり、自然とともにある暮らし、それを確認することによって日本人、とりわけ京都人は深い心のやすらぎを覚えるのである。坪庭は、そのために京都の市民が作りだした装置であり、自然と人間を解け合わせる通路なのである。

外界から家屋や部屋を遮断し、クーラーや暖房機や除湿機で人工的に快適環境をつくる生活は、やがて立ちゆかなくなるのではあるまいか。京都の坪庭の思想から21世紀が学ぶものは大きい。

伝統文化を再発見する

京都は千年にわたって日本文化の創造と再生を繰り返してきた。そればかりか、その成果を伝統文化として今日まで保持してきている。21世紀に相応しい「心の作法」も、そうした伝統文化に学ぶ必要がある。

京都では茶道、華道、書道など、さまざまな伝統文化が暮らしに息づき、それを支える職人の生き方や技も他地方に比べてなお、地域社会に根づいている。だが、近代になって急速に忘れ去られてしまった連歌(俳諧=連句)のようなものもある。

連歌は多数の者が座をつくり、共同して、最初の発句から挙句に至るまで五七五、七七を交互に詠み継いでいくもので、中世・近世の700年間、和歌や俳句に匹敵するわが国の国民的な文学であった。しかも、和歌は大和に起こり、近代の俳句は東京で成立したが、両者をつなぐ連歌は、千年の都で

あった京都が生み出した文学なのである。

連歌は日本独特の文学であり、近代の日本が受け入れた西洋近代文学が個性や個人を絶対化するのに対し、個と全体、自己と他者を調和させ、ともに生かそうとするものである。国文学者の能勢朝次は連歌について次のように言う。

「句々の作者は、前句を生かすとともに、全体の調和美を生かすことにおいてのみ、作句を価値あらしめ得るのである。個が個として存在価値を発揮することが、同時に他を生かし、また全体の秩序を生かすことであり、全体の秩序に参加し、他を生かすことが、同時に自己を生かす唯一の道である」(連句芸術の性格)

このような文学を否定したのが近代の日本であった。近代さらには戦後が時代の風潮に乗って否定してしまった伝統文化を見直し、その価値を再発見する作業も、京都から21世紀の「心の作法」を構築するにあたって不可欠ではないだろうか。



香水を祀る御香宮神社

いとをかし

心の遊山を楽しむ 教育としつけを

戦後60年、伝統文化の衰退と地域共同体の崩壊が叫ばれて、久しい。その点、京都は古くから強い地域コミュニティと市民の自治意識によって支えられてきた。そのルーツは室町時代以来の町衆にさかのぼる。町衆は市中に住む商工業者を中心に、武家、公家までも含む多様な階層の人びとからなり、各町は地域的に連合して町組を作り上げ、自治を行っていた。京都の自治の特徴は、個人や傑出した人物でなく、町組という室町以来培われてきた自治組織が支えてきた点にある。

町衆は庶民文化の担い手ともなり、茶の湯、猿楽などの芸能に進出する者も出た。

各町の町会所に集い、代表者である町年寄のもとで町内の問題を話し合い、宴会を開いて親睦を図った。町衆が寄付を持ち寄り、明治2年に発足した日本初の小学校である番組小学校は、こうした町組の会所兼小学校としてできたものである。

各町内は祭りや地蔵盆のような年中行事で結束を固め、芸事は6歳6月6日から始め、各家は水うち、門掃きで隣家と絶妙の距離を保ちながら細く長くお付き合いを続けるなど、京都ならではの智慧を継承してきた。戦後の急速な経済成長、都市化で共同体意識の失せた各都市は、こうした京都の智慧に学ぶ点が多いのではないだろうか。

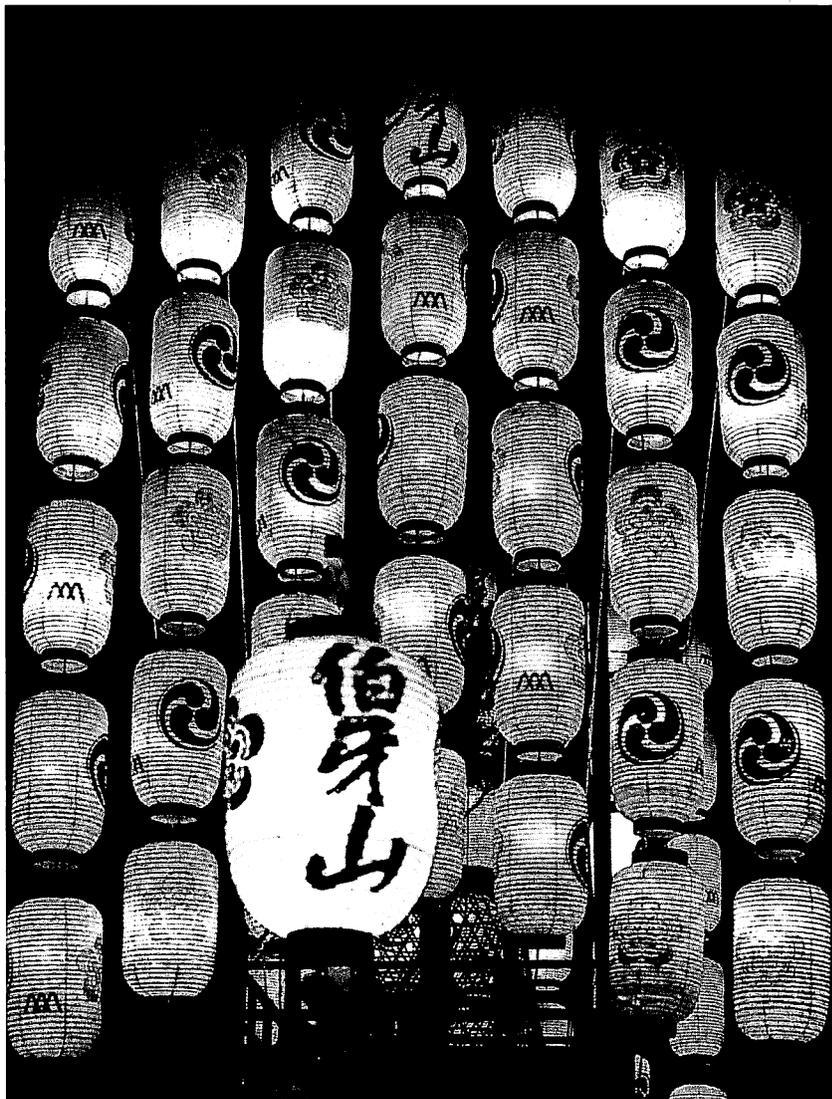


地蔵盆の百万遍大数珠繰り (左京区)

提言 II-1.....

祭りや地蔵盆が伝承する 価値を再発見する

京都では市内各所で氏神さんを中心とする祭りや町内ごとの地蔵盆が行われ、そのことが地域の一体感の醸成を図ってきた。町内の世話役たちが役割を分担しながら地元の人たちをリードすることで、熟年層から若い世代へと決まりごとが継承されている。京の祭りを代表する祇園祭の山鉾町では、子どもたちは小学校低学年からはやし囃子方などとして祭りに参加する。その時点で年齢とは無関係に先輩・後輩の上下関係が生まれ、これを重んじる。座しての挨拶で始まる稽古では、高校生や大学生が後片付けや後輩の面倒をみ、集まる人の数と上下関係に応じて座布団の配置を変えることを学ぶなど、社会性を身につける場となっている。鉾に乗るときは散髪等の身だしなみを整えるなど、公の場での振る舞い方も自ずと身につける。稚児は、ほほひと月のあいだ親ではなく稚児係に世話をされる一方、神の子として扱われ、儀式は稚児の動きに合わせて進行する。このような祭り運営の秩序を支える礼儀作法は、山鉾町という自治組織で教育され、脈々と継承されてきた。これらの経験が、後に子どもたちの精神的礎となることは想像に難くない。



立ち入らないことで、細く長いお付き合いを続けようとの伝統の智恵である。水うちは門前や玄関をきれいに保つだけでなく、猛暑の時期には一服の涼をよぶ自然の効果も備えている。

いわば大人の付き合い方、対人関係のあり方を先人の智恵として現代に蘇生させる取り組みとしてはどうだろうか。

提言 II-2.....

先人の智恵と 暮らしの心を受け継ぐ

京都の古い町内には、昔から門掃き、水うちといった良き習慣が受け継がれている。しかし、掃くのは自分の家の前だけで、隣家との境界線付近は少し踏み込んで掃くものの、決して全部を掃いてはならないという不文律がある。相手のプライバシーに

提言 II-3.....

一見さんお断りの 合理性に学ぶ

「一見さんお断り」の風習は、他都市の人からは、京都の閉鎖性を代表するかのように言われるが、決してそうではない。京都



提言 II-4

小学校教育に茶道、華道を導入する

室町時代に始まり、いまや日本の伝統文化の代表となった茶道や華道だが、趣味が多様化した現代では若い人の習得が極端に少なく、先細りの状況である。だが、茶道を学ぶことは、着物の着付けから、畳の上での礼儀作法、軸や道具の見分け方、花の生け方まで、日本文化を総合的に学ぶことでもある。「茶禅一致」、「一期一会」という言葉にみられる深い精神性も見逃せない。茶禅一致とは、茶道の奥義と禅道は一致するということ。一期一会とは茶会的心構えで、一生に一度限りの出会いであると心得て、心を尽くしてもてなすことの大切さを説いている。

「心はまず形から学ぶ」という日本の伝統からみたとき、こうした伝統文化はまだ物心のつかない小学生のころから学ばせる必要がある。まさに、芸事は6歳6月6日から学ばせてきた京都の智恵の踏襲である。一般家庭では洋風化の普及で和室の無い家の多いなか、これを学校で学ばせる意義は大きい。理屈は大人になってからわかればよいのである。21世紀の「心の作法」を考えると、小学校教育に茶道、華道を取り入れることにより伝統文化の裾野を広げ、それに携わる伝統産業をも振興し、京都の経済の活性にもつながるであろう。

の古いお茶屋さん、料理屋さん、旅館に見られる「一見さんお断り」にはそれなりの合理性がある。お茶屋さんを例にとれば、店は年寄りの女将が住居としても使っている職住一体の住まいであり、そこに見知らぬ他人をあげることは、自分の家に見知らぬ他人をあげるのと同じことである。「一見さんお断り」を掲げることで、危険なリスクを未然に防止しようという智恵なのである。もう一つの理由は、あがっていただくお客さんにはその客の好みも知りぬいたうで精一杯のおもてなしをしたいが、初めて会う一見さんではそれができない。これがお断りする理由である。これもお客さんに満足してもらい、細く長くお付き合いを大切にする京都人ならではの心配りなのである。

もののあはれ

◆ 心の花野を育み 愛しよう

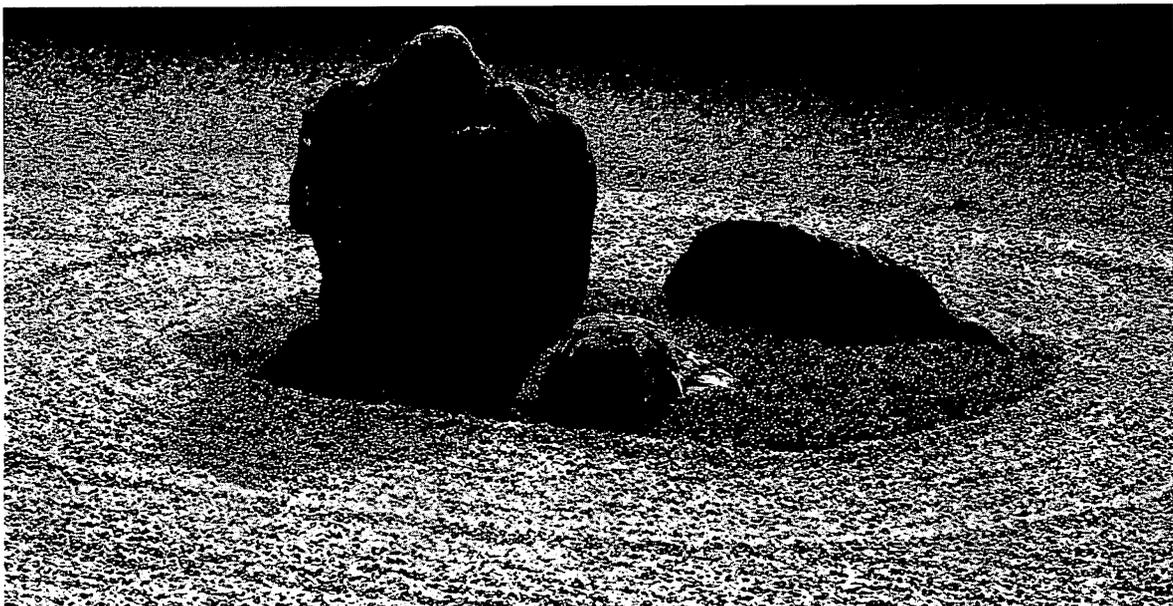
20世紀は「科学技術の世紀」であり、「戦争の世紀」であった。

物理学を中核とする西欧科学は、自然は時計のような精巧な機械にすぎないと見なし、実験によって見いだされた規則性を数式化するという「科学的手法」を用いて、物理・化学的な法則を次々に見いだしていった。そうした成果を応用する科学技術は、利便性や快適性、効率性という人間中心主義的な価値観を最優先させた製品を次々に生みだしていった。そのため、近代以前には常識であった自然界に神秘性や生命性を認める生命論的な自然観は失われ、それに代わって、自然は単なる工業原材料（資源）の「倉庫」であり、各種廃棄物を投げ捨てる「ゴミ箱」にすぎないという傲慢な自然観が蔓延することになった。

こうした自然観の衰弱に対して、本来は警鐘を鳴らすべきはずの社会科学は、物理学を批判するどころか、逆に「科学的方法

を無批判に導入したのである。単純な数理モデルに則って経済活動を説明しようとする計量経済学や、人間性を実験と数理統計学で解明しようとする実験心理学などが、その代表例である。この結果、利己的・利他的な価値観が社会を風靡し、その背後で自然に対する畏敬の念や同胞と将来世代を思いやる気遣いなどはすっかり失われてしまった。

1914年に第一次世界大戦が勃発すると、いわゆる列強は科学技術を用いて通信機器と武器の開発に邁進し、わずか4年間で、長距離砲、戦闘機、爆撃機、戦車、潜水艦、毒ガスなどの革新的な新兵器を次々と発明し、未曾有の戦死者を生みだした。戦争終結後は、有り余った軍需施設を転用して、自動車、電気製品、人造繊維、農薬などの民生用品を大量生産し、大量消費の市場を全世界的に拡大した。そのため、地球規模で資源枯渇と環境破壊が同時進行し、生態



竜安寺石庭

山川草木に親しむ

系が脅かされるに至った。また資源確保と市場拡大のために地域的な戦争を世界各地で次々に引き起こし、人心を極度に荒廃させた。

このように20世紀は、科学技術と戦争が表裏一体となって、自然観から倫理観に至るまで、人間の知性と感性を総体として衰弱化させ、「心の作法」を衰退させたのである。明治維新以降の近代化によって日本人の「心の作法」が蝕まれはじめ、敗戦後の米国追随によって腐食が加速したのだとすれば、21世紀にふさわしい「心の作法」を打ち立てるには3世代にわたる継続的な努力が必要である。つまり、首長が交代するたびに変わる行政的スローガンではなく、21世紀を通じて取り組むべき課題として、自然と生命を敬い、同胞と将来世代を思いやり、利己心を信仰や創造活動を通じて昇華させるといった「心の作法」の再構築を訴え続けることが必要である。

①近代都市は自然破壊と生命虐殺の上に築かれてきたゆえに、周辺の山川草木といえども一種の人工物に過ぎず、そこに畏敬の念を向ける人はいない。だが、東山には清水寺や稲荷大社など数多くの寺社が鎮座している。また、北山には北山杉の美林が、西山には美しい竹林が広がっていて、木材や竹材など工芸品の原材料や、山菜、茸、竹の子のような山の幸の供給源となっている。

こうした山々を季節が変わるたびに家族連れで散策し、林業の実態を見学したり、寺社を訪ねたり祭礼に参加したりすれば、自ずから山の美しさと豊かな恵みに感謝し、慈しむ心が養われるであろう。

②北山を源流とする鴨川や桂川も、単に水を流すだけの水路ではない。源流近くには貴船神社や鞍馬寺など、水に感謝し水害防止を祈願する寺社が祀られている。流水もかつては水運や友禅染に利用されてきたし、今も水遊びの場となっている。こうした寺社で執り行われる祭礼に参加すれば、京都のんびりとして水は単なるH₂Oではなく、後世に受け渡すべき恵みであり宝であることが体得できよう。そうなれば日常生活における水の使い方やゴミの捨て方も大きく変わるはずである。

③京町家にある坪庭は「自然と人間を解け合わせる通路である」と言われている。その意味では、高瀬川や堀川などの運河は、交通路として機能するだけでなく、市街地における坪庭のような役目を果たしていたと言えるかもしれない。現在進行中の堀川の再生事業は、市民の水意識を大きく高めるものだと期待できるが、同様に道祖川、西洞院・西堀川、京極川などかつての水路も、市民が自然と解け合う通路として積極的に再生させるべきではないだろうか。



下鴨神社「糺の森」

提言Ⅲ-2

家団欒の食卓を通じて 自然の恵みを実感する

都市の食生活の大部分は工業的に大量生産された加工食品で賄われている。生鮮食品ですら遠隔地から運ばれてきたものばかりである。ところが京都では、いまだに豆腐や湯葉、漬物、うどん、京菓子などが町内ごとに家内労働的に作られていて、これらはすべて上質な地下水の賜物である。さらに、名物の京野菜を育ててきた沖積土壌は、鴨川や桂川などが氾濫のたびに上流からもたらされてきたものである。

食卓に並ぶ旬のものを使ったおぼんざいの素材と調理法に思いを馳せれば、自ずから京都を取り巻く山川草木に対する感謝の念が湧いてくることになろう。

提言Ⅲ-3

ハレの行事を通じて 季節感を磨く

都市の居住空間は外界と遮断された人工空間であり、季節の移り変わりを肌で感じ取ることは難しい。しかし、貴船川の川床や鴨川の床のように、あるいは平野神社や円山公園の夜桜見物のように、さらには虫封じのお宮参りのように、京都では節目節目に戸外に出て季節感を全身で味わう習慣が健在である。

なにかの行事の帰りなど、京都の人は折々に京料理店に立ち寄る。掃き清められ盛り塩された店先に、打ち水や暮色に揺れるほの明かりがある。路地をつたい、庭石を踏み、のれんをくぐる。丁寧なお辞儀が出迎え、四季を醸す生花や調度が部屋までの案内を彩る。挨拶に訪う女将のきものはほんの旬日程度その頃場合にしか袖を通せない意匠が施され、掛け軸のモチーフも僅か



御手洗祭（下鴨神社）

に季節を先駆けて細やかに呼応している。器や盛りつけは言わずもがな、庭の遣り水、風鈴、香と店毎の流儀で五感をもてなす。スローフードが議論される今、想えば世の喧騒がコンビニエンスでファストなものを求め、一方で西洋のテーブルマナーがいかに食欲を引き伸ばし、優雅に満たすかという目的のもとに極めて合理的に生みだされたものであるかを勘案しても、京料理ほど食物を口に運ぶ行為にこれほどまでに多様な要素とセンスを導入し、豊かな時間というご馳走を振る舞い、おもてなしとして遥か昔より高度に洗練されてきた食文化は類がない。年に数度でも家族揃って贅を味わい、季節感を磨くことは有意義である。

提言Ⅲ-4

新たな環境教育 として取り組む

現行の政教分離政策のもとでは、公教育の場で各種の伝統行事の宗教的意義を教えることはできない。しかし、山川草木にまつわる各種の宗教的な行事や日常的な慣習には、理屈抜きに自然（生命）への畏敬と感謝の念を育み、物を大切に自然を不必要に傷つけない生活習慣を身につけさせるという教育効果があることは明らかである。

こうした行事と慣習を21世紀の地球環境問題とリンクさせて、新たな生活作法を学ばせることは「総合的な学習」の重要なテーマとなりうるものであろう。

もののあっぱれ

「信用」を重んじ「己」を律する 心を育む

西陣や室町など“のれん”を誇る京都の老舗には、今なお代々受け継がれる「家訓」や「店則」、ならびにその教えが残る。家訓や店則は、集約すれば「のれんを守ること」を第一義に、常に変化する世にあっていかにすれば家業が永続し、発展できるかを伝え記したものである。言葉を変えれば“不易流行”の“不易”の部分、すなわち「普遍的な経営理念」を書き表したものであると言える。

その教えの第一は、「信用」を大切にすること。「しょうろ正路の渡世」、わごう「和合の経営」、ちそく「知足の生活」の意味するところをしっかりと理解し、もっぱら「家業に励み」、ふり「浮利を追わず」、ぶんをわきまえ「分をわきまえ」、質素儉約「質素儉約」を旨として努力すればその商いは自ずから世に受け入れられ、繁盛するという次第である。

こうした京都の家訓や店則を現実の経営に写し換えた経営のあり方が一般的には“京都商法”として広く知られるが、京都商法はまさに商いのなかに道徳や倫理観を取り入れた“ものの考え方”であり、

ある意味において現在の企業社会はもとより一般家庭の暮らしにおいても、一つの教訓として参考になる点が多い。

以下は家訓、店則をもとにして、今なお京都に残る多くの教えのなかから一般の人びとにも通じる五つの教えについて示してみたい。

提言Ⅳ-1……………

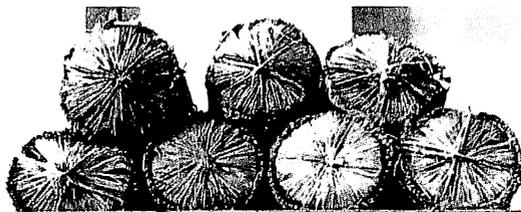
信用を築く三つの要件

信用を築くには長年の努力を要するが、信用を失うのは一瞬のことである。京都の老舗ではのれんを守る第一の要件として今

なお「一に信用、二に信用、三に信用」の教えをしっかりと守っている。

『正路の渡世』——正しい道を歩んで世渡りすることの大切さを教えるもの。もっぱら「家業」に励み、投機や楽して利を得ることを厳に戒める言葉。

『和合の経営』——人はみな同胞であり兄弟である。従って経



炭俵 (中京区 吉田家)

営者は根本的には「主従は友達である」との認識を持ち、その主従のまとまりによってのれんを守ることが大切であるとの教え。『知足の生活』——暮らしは質素儉約にして、分限を越えることなく分限以下に下がることなく、身分相応に暮らすことが肝要だという教え。

提言 IV-2

「見てござる」という自戒

人の目につかない所でも、自らの行いは「天が見てござる」、「世間が見てござる」、「己の心が見てござる」との教え。人はややもすれば、欲望や自分の行為に対して甘えが出る。誰も見ていないようでも自分の行為は常に自分自身の心が見ているので、いつの場合にも恥ずかしい思いをしないよう十分に心して生きていかねばならないと教える。西陣、室町では、いわゆる「商人としての名誉を尊び」、「不実を憎み」、「老舗の面目と信用の維持を教える」ものとして今なお語り継がれている。

提言 IV-3

「吾唯足知」の自律

龍安寺のつくばいに刻まれている有名な言葉であり、「信用を築く三つの要件」のなかの『知足の生活』とも通ずるものである。人はみなカミに生かされ、人びとの支えによって生きているものだから、人生を送るうえで、その生活にとって必要以上の贅沢を慎み、常に感謝の念を持つことが大切だという教えである。峰山の矢谷家の家訓にも、「足ることを知れば、家は貧しいといへども心は驕者なり。足ることを知らざれば、家は富めりといへども心は貧者なり。よくわきまえて、かりにも奢らず、物好みをすべからず。諺に好きが身を亡ぼす

といえる心得べし」——いたずらに高きを望まず、自分の与えられた環境のもとで実力相応のペースにて一步一步堅実な前進を続けることの大切さについて戒めている。

提言 IV-4

「五常の徳」の実行

論語で言う「仁・義・礼・智・信」の教えを守り、身の分限を忘れることなく分相応に暮らすことの大切さを諭すもの。「仁」は思いやりの心をもつこと、「義」は正しい行いをする事、「礼」は豊かな心を示すこと、「智」は正しい判断をすること、「信」は周りの人から信頼されることを意味するものである。

提言 IV-5

「三方良し」と「先義後利」 がもたらす繁栄

「三方良し」は近江商法の教えの一つとして知られるが、京都の家訓のなかにも同様の言葉が記されている。その教えるところは、売り手も「買ってもらってよかった」と誇りを持ち、買い手も「買ってよかった」と喜び、かつその商いが「社会のためにも役に立つ」、という商売のあり方を教えるものである。結局、売り手・買い手・一般の人びと（世間）がそれぞれに喜び信頼されるものであれば、家業は自ずから繁栄するという喩えである。

「先義後利」とは、常に相手の立場や相手の利益になることを先に、自分の立場や自分にとって利になることは後回しにするというものの考え方。この「先義後利」の考え方に立てば相手から喜ばれ、結果として自らもいずれ徳を得るといえるという教えである。

21世紀委員会委員（平成15～16年度）

（順不同・敬称略／平成17年3月31日現在）

●座長

山折 哲雄 国際日本文化研究センター 所長

●委員長

内田 昌一 代表幹事／京都青果合同(株) 代表取締役会長

●委員

横山 俊夫 京都大学大学院地球環境学堂三才学林 学林長

原田 憲一 京都造形芸術大学全学科目研究室 教授

高城 修三 芥川賞作家

高木 壽一 京都市 副市長

吉澤 健吉 (株)京都新聞社 編集局次長

堀場 厚 代表幹事／(株)堀場製作所 代表取締役社長

細見 吉郎 副代表幹事／宝ホールディングス(株) 代表取締役会長

市田ひろみ (株)市田美容室 代表取締役社長

池坊 由紀 (財)池坊華道会 理事

江口 克彦 (株)PHP総合研究所 代表取締役社長

山口 祥二 (株)末富 専務取締役

坂田 幸久 (株)近畿写真 代表取締役社長

藤本 圭司 (社)京都経済同友会 常任幹事事務局長

●資料準備委員

西尾 光弘 NEXUS 代表

●事務局

戸田 浩 (社)京都経済同友会 事務局次長

中山愛子 (社)京都経済同友会 事務局員

2005年9月 発行

発行者 社団法人京都経済同友会

京都市中京区烏丸通夷川上ル

京都商工会議所ビル内 〒604-0862

TEL.075-222-0881 FAX.075-222-0883

制作協力 京都通信社

撮影 神谷 潔

